

本誌独占掲載

鄧小平「自己批判」全文

副総理→総理復活へのセレモニー

三中全会に際しての講話

資料に基づけば、去る七月二十日、中国共産党第十期三中全会の閉幕の前日に、鄧小平は、北京で開かれた各省・市・自治区の党委員会責任者の座談会を召集し、華国鋒もこの座談会に出席したという。この会合での鄧小平講話の要点は次のようなものである。

毛主席との確執明らか

同志のみなさん、ご機嫌いかがですか。同志のみなさんと再び席を共にする機会がありましたことを、中央に感謝し、毛主席・葉副主席およびこの場にいらっしやる同志のみなさんに感謝します。み



なさんは私を大いに愛護し、信任して下さい、私がみなさんの期待にそむくことなどないことを希望しておられます。

毛主席は生前に、共産党員は、風雨をへなければならぬ、世相を見なければならぬと言われましたが、みなさんはみないくつかの風雨をへ、また世相を見できたことと思います。しかしそれは一度や二度ではなく、しかも一度が次の一度の試練につながらねばならないのです。本来、私は次のように考えていました。私のような老革命家は、どんな風雨もへたことがないというのか？ いかなる世相も見たことがないというのか？ 現在はわれわれの天下であり、一世代先輩の者は、よい仲間さえもってあれば、全国の人民が努力して経済の貧しさや文化の立ち遅れを改善するのを指導し、中国を富強の現代化された国家に建設し、対外的にもきつと不敗の地を打ち

体現しえたのです。

文化大革命に欠点があるでしょうか？ あります。欠点とは悪いところのことですが、それはよいことに変えられます。欠点とはすなわち、党の規律を過度にゆるめ過ぎたために、林彪や四人組などこれらの野心家にそのすきをつけこまれ、文化大革命を彼らが党の権力を篡奪する機会とさせてしまい、彼らに実に広範な革命幹部を攻撃させ、指導的立場を樹立させ、組織を分裂させ、工農業生産をひどく破壊させ、国民経済を破壊させ、大いに後退させてほとんど封建時代にまで後退させてしまったことであります。裏を返して言えば、もしも文化大革命がなかったなら、今日われわれはどうして党内にまだまだ潜んでいるであろうこれらの陰謀的野心家を、はつきり見出せたでしょうか？ 彼らに演じさせる機会がなかったなら、彼らは飛び出てくるはずがないのです。そして老革命家が一人一人死ぬのを待つて、そのとき彼らがおどり出てくるのをあなたが許さないとしても、彼らはおどり出ようとしますから、禍害はさらに大きくなるでしょう。病いは早期発見すれば治り易いが、遅れると人の命をおびやかします。同志のみなさんは、この道理を非常に容易に理解できますが、いま言うのはたやすいことであっても、文化大革命の時期はあんなに大変だったのです。

私が江西へ行って改造していたとき、毛主席は私に何か意見がないかと尋ねましたが、私はこれといって言うことはありませんでした。毛主席は私に以前の工作はすぐれていたが、いまはやることに秩序がなく、頭に階級闘争の観念が欠けてきてしまった、君は下層に行つて実践してくるようにと言われました。

立て、対内的にも人民にさらに好い日々を送らせることができなれば、それでいいではないか？ そのうえ、いったいどんな風雨が必要だというのか？ そのうえ、いったいどんな世相を見なければならぬというのか？ と。実際には間違っていました。いくつものものは、決して人の意志で動かせるものではなく、とくに、思想意識のうえではそうなのです。

わが党はマルクス主義を堅持し、社会主義路線を堅持しています。が、何人かの人びとは、マルクス主義は不要であり、社会主義も不要であるとしています。これらの人びとは往々にして、われわれが風もなく波も静かだと思っている当然の時期を利用して、暗がりであれわれの足をひっかけてわれわれを仰向けにころばせ、彼らはこの機に乗じて中国を資本主義の道に進ませるのです。劉少奇はこの種の人物です。もしも毛主席が文化大革命を發動せず、資本主義とマルクス主義、社会主義とのあいだの闘争において、大字報・大鳴大放・大弁論を通過させず、われわれにはつきりと認識させることをしなかったなら、私は本当に劉少奇に鼻を引っぱられて歩いていくたかもしれない。

これはなにを物語るのでしょうか？ 私は何年も太平な日々を過ごし、思想があいまいになってしまい、路線をはつきりと言えなくなつてしまったのです。多くの同志もこの種の誤りをもつていました。現在は基本的に正してきました。これは文化大革命の第一の成果です。ですから文化大革命の功績といえは、主なもの、党の本質を保持したことであり、また国家が色を変色しないよう保持したことであり、毛主席の偉大さがあってこそ、ここにそれを

中国は果たして安定しているか！？ わずか一年の間に厳しく批判され、そして復活、自己批判した鄧小平の立場ノ

当時、私は承服せず、林彪について実践するにしくはない、功績がないのに功績があるとすることを習得し、すべてを懐疑し、すべてを攻撃することを習得して、はじめて行ないに秩序ができ、階級闘争の觀念が強くなるのだと言って答えました。毛主席は言葉に借りを含め、ちょっと笑って、「林彪が正しいかどうか、歴史が判断するだろう。君は承服せざるをえないよ」と言われた。想えば、毛主席の言葉は確かに天才的な予見であり、さらに絶妙に林彪に実演させたわけで、古くから今日まで、いったい誰がこのような度胸と見識をもてたであろうか？ 中央における工作時間に、私の欠点にたいして毛主席が何度か行なった批判は、みな非常に要点をついたものであった。

文革前、私が事務を必要以上に重視し、劉少奇と多く接触していたので、毛主席の指示を仰ぐことも少なかった頃、毛主席は批判して、「私が口を開けば闘争を論じると君はいやがったが、それも少なくなった。ただ君たちが一緒にくっついていて、欠点を大きくするのはいけない」と言われました。想い返せば、寸分の違いもなく毛主席の言うとおりであり、当時、毛主席の言葉をよく聞いていれば、路線の誤りを犯しえなかったし、文革が始まって、すぐに打倒されることもありえなかったであろう。

毛主席は再び私を登用し仕事をさせました。私は彼の期待にそむくことを恐れましたが、すぐに「四つの現代化」路線に対する認識でまた問題を出してしまい、「カナメ」と「細目」を一緒に論じ、結果として「四人組」に尻尾をつかまれ、痛い一撃をくらわされました。同志のみなさんは、これは毛主席が私をくびににして、私の官職を解任したのだと言いかもしませんが、実際はそうではなく、いわゆる内情はかくのごとくなのです。江青が、私の頭はとがって

いるので、紗の帽子（青、官吏の礼装用に用いられた帽子——訳者）がうまく頭におさまっていないといって笑ったのです。あの頃、毛主席はすでに病んでおり、気分がすぐれず、また私にたいして、鉄は鋼になつていないと恨まれました。

「四人組」はさらに毎日毛主席を欺き、また、細心の注意を払って「天安門事件」をむりやり私のせいにし、大局全体を顧みて私を引き降ろしたのです。このことについては、あの方をいぶかしく思うことはできないのであり、私自身をいぶかしく思うべきであり、「四人組」が陰悪にも私にすぐこのできない無実の罪をきせたことをいぶかしく思うべきなのです。現在真相がすっかり判明し、「天安門事件」は「四人組」が一手に指導してやったものであり、詭計はやはり張春橋・姚文元が考え出したものだ毛主席がすでにはっきり述べています。私はこの不愉快なことを再び論じたくありません。「四人組」と戦いましたが、このことについては全中央が責任を負うべきで責任を個人におしつけることはできませんし、個人では誰もこの責任を負いきれないのです。

周恩来への讃美

あるいは、ある人は次のように尋ねるかもしれませんし、外国人は、まさにこう尋ねています。どうして「四人組」が形成されたのか？ 誰が「四人組」に騒動を引き起こす権力を与えたのか？ と。われわれは、「四人組」の形成は階級闘争の必然の法則であり、階級闘争が存在しさえすれば、やはり「四人組」式の人物は生まれるのであり、そうでなければ階級闘争はないのだ、と答えます。誰も「四人組」に騒動を起こす権力を与えたわけではなく、これは、彼らが党を乗っ取り、権力を奪い取ったことの自己表現なのです。「四人

組」がのさばっていたとき、党中央は分裂していました。毛主席が病気で危ういのに乗じ、小集団で制圧できた部分の勢力で悪事を働いたのがこんどの出来事なのです。

中央のよき多くの同志は、みな彼らに同調しない闘争を行ない、華主席を頭とする党中央が党と国家の利益を代表し、真理を代表して「四人組」と何度もわたりあつて戦いました。毛主席の病気が重いと、華主席と葉副主席は、大部分の中央の指導的同志と連携し、一回また一回と「四人組」の凶悪な気焰を圧倒しました。そうでなければ、毛主席の臨終前に、「四人組」は「中央臨時指導小組」をつくっていたでしょうし、わが軍隊も張春橋の手に握られていたかもしれないかもしれません。もしもそうだったことになっていたら、今日同志のみなさんは私と共にここに座っていることができたでしょうか。とつくに御陀仏（ごだつ）になつていたでしょう。

毛主席は独特のすぐれた眼識をもっており、後継者として華主席を選定しました。これは将棋でいえば、正しいさし方です。華主席は「四人組」に王手をかけ、毛沢東路線を堅持して歩み、一心に党と国家の利益を守り続けました。これはすべて一世代先輩の革命家が信任するところであり、まったく安心して彼を家長にさせたのです。われわれは熱烈に支持し擁護しなくてはなりません。わが党は一つの大家庭であり、単に家父長に頼るのはよくありません。大切なのは、この大家庭の一人一人の成員がみな強く団結し、名利を争わないことであり、そうしてこそはじめて前途があるのです。「四人組」はわれわれの大家庭を破壊し、てんでんばらばらに分裂させました。われわれはだまされませんが、だまされた人はいなかったでしょうか？ いまは、はなはだしい場合は、利に惑わされ、かつて自覚的に「四人組」と共に歩んだ人もいましたが、

ワールドカップは、オリンピック大会、世界選手権大会とともに、バレーボール3大国際大会のひとつです。

Volley Ball World Cup '77

開催期日

女子 11月8日～11月15日
男子 11月17日～11月29日

参加国

女子 8カ国
男子 12カ国

開催地

全国23会場

フジテレビ系独占放送



われわれは決して許しません。

だまされた人は、それを認めて、党とはつきりと話し合うのがよいでしょう。自覚的に自分を「四人組」の仲間の一人とみなすのなら、少しも手ごころを加えず、彼を暴き出して制裁を加えなければなりません。「四人組」をみくびつてはいけません。彼らは失脚しましたが、各省・市・地区にまだ潜伏している一つの黒い組織があつて、この黒い組織が、なんとわれわれの敬愛する周総理をいい加減にあしらおうとしたのです。周総理の病状の急激な悪化は、すなわちこの組織と関係があつたのであり、黒い組織は別名『死光』というのです。独立した綱領をもっており、発展計画や行動計画もあり、まったく一つの「黒手党」の行為の山口によつています。当面の形勢が不利になると、しばらく動こうとせず、結局、時機が熟するのを待って、それから行動しようとするのです。同志のみなさんは深く注意しなければならず、多大な力を労しても、必ずやこの癌を取り除かねばなりません。

われわれがカナメをつかんで国を治め、全国が大いに治まり、現代化を行なうには、敵が再び防害したり、破壊したりできないように、周総理の教えである安定團結を心に留め、参考にしなければなりません。みなさんはいずれも歳のいった方であり、一生涯党と国家のためにとても大きな貢献をしました。次の世代に譲って偉大な事業を継承してもらわねばなりません。注意深く、そして自分の全力を傾けて、死ぬまで国のために尽くすという周総理の偉大な精神を学ばねばなりません。

短い余生のなかで「四人組」の手中でつくられた重大な損失を、いち早く取り戻し、工業、農業をしつかり、いち速く行うための各項の先導的仕事を大に行ないましょう。どの同志も、党と国家の

毛主席はすでに、文化大革命は中断するのではなく、二回、三回と行なわなければならない、場合によっては、九回も十回も行なわなければならないブルジョア階級が存在するかぎり、搾取階級の思想がまだ存在するかぎり、プロレタリア階級とすべての搾取階級とのあいだの闘争も必ず継続して存在する、と再三にわたって明確に指示しています。

この闘争は、イデオロギーの領域に存在するばかりでなく、政治、経済などのすべての領域にも存在しています。この闘争はきつと何度も繰り返しあらわれるでしょう。中心的問題はすなわち、やはり政権の問題です。したがって、今日、われわれが行なっている、あの悔い改めようとしないうる走資派との闘争は、たんに、なにか表面上の「奇談怪論」（文化大革命のマイナス面を指摘する意見にたいして当時それが「奇談怪論」として排斥された——訳者）のためではなく、あるいは彼の言うような「原則は同じだが、やり方が違う」などという、ただそれだけの事柄ではなくして、プロレタリア階級とブルジョア階級の指導権をめぐる一場の争奪であり、中国がどこへ行くかを決定する問題なのであります。

毛主席は、「もし林彪一味が権力の座についたなら、資本主義制度を行なうことは実に簡単なことだ」と言っています。この言葉は、いったい誰に聞かせるために言った言葉であらうか。林彪はすでに死んでしまったのだから、当然、彼に聞かせるために言ったのではなくて、あの走資派に聞かせるために言ったのです。当時、毛主席はすでに一連の復活後退の逆流に気づき、旧に復する巻返し陰謀が、まさに醸成されつつあるのを見抜いており、この言葉を通じて、あの走資派を目覚めさせ、早いうちに正しい路線に戻らせることを希望したのである。これは、まさにわれわれの願ひなのです。

ためにより多く功勞を立て、善行を争うことを希望します。今日、各地の指導的同志がみな席を共にし、私がみなさんと少々話をする。ことを華主席が望まれたので、ここで気軽に話したい。これは世間話をしたようなもので、報告ではありません。さらに同志のみなさんの三中全会にたいする意見を聞きたいと思っています。



華国鋒の〈内部
伝達文件〉要約

右からの巻返し の風潮に反撃 し鄧小平を批判する講話(一九七六 年三月二五)

走資派に反撃しよう

同志のみなさん。みなさんに敬意を表します！ 清華大学と北京大学の広範な先生と生徒、そして職員労働者のみなさんは、革命運動の闘争の重点をしつかりつかみ、右からの巻返しをあやしげな風潮に力強く反撃し、全国の大変良いお手本となりました。当面の運動を深く徹底して行なうことができるか否かは、党と国家の運命と前途にかかわる大事であります。

それにもかかわらず、あの走資派は、歴史上、ブルジョア階級に死んでもしがみついて離れないすべての人びととまったく同様に、形勢を誤って算定し、自己を過大評価し、彼にたいする党と人民の寛大さや実践のなかで誤りを改める機会を彼に与えるという一つの方法を、彼は、軟弱であるとか無能であるとか思っているのです。

彼とその追従者は、再び権力の座に登場して何日もたたないうちに、事態が切迫してぐずぐずしていらなくなり、あちこち逃げ惑いました。自己の誤りをがんとして否認するばかりでなく、彼にたいする党と毛主席の辛抱強い教育について一言も取り上げませんでした。それどころか反対に、なんと文化大革命にたいする不満と敵視の顔を丸出しにし、彼にたいする毛主席の辛抱強い教育にたいして、毛主席が自ら指導したプロレタリア文化大革命を中傷し、ブルジョア階級のあいだに一旦は鎮まっていた熱狂病をまたぞろ引き起こしました。彼は大衆運動のなかのあるいくつかの欠点と根本的ではない誤りをとらえ、拡大し、ありもしないことをつくり出し、言いがかりをつけ、毛主席が指導したプロレタリア文化大革命をあざむいて、林彪反党集団の「皇帝は天才」という論議を持ち出し、「問題はただ林彪一人にあるのではなく、林彪が死んでしまったからといって、過去のことは追及しないというわけにはいかない」とあてこすりを言っています。党内のあの走資派は教育戦線において復活後退を行ない、科学技術戦線においては、「研究を専業とし、専門家を主とする」ことを行ない、科学技術戦線の社会主義革命を否定し、文芸戦線においては革命模範劇を攻撃しました。

すべての陰謀を粉砕

ことは、北京のあの走資派がなんと毛主席、党中央の再三の勧告

を顧みず、悪いのに輪をかけて、ますますひどく誤った道に沿って滑り落ちるというところまで発展しました。彼とその追隨者は

——これらの追隨者のあるものは中央におり、あるものは地方にいて、党と結んで私利を営み、公然と毛主席の指示を歪曲し、党の基本路線を改竄し、「三項目の指示をカナメとする」(三項目の指示とは、①プロレタリア独裁理論を学習して修正主義に反対し修正主義を防止すること、②安定團結を促すこと、③国民経済をうまくやること、という毛沢東の指示であるが、鄧小平はこの三項目を並列させて階級闘争というカナメを忘れていたときに批判された——記者)を全力を尽くしておしすすめ、階級闘争を否定し、「階級闘争消滅論」、「反動的な「唯生産力論」、「唯心主義経験論」を鼓吹しました。毛主席の革命路線を放棄し、「四つの現代化」(去る八月の中国共産党十一全大会で党規約にも採択された「農業、工業、国防、科学技術の四つの現代化」——記者)を大に行ない、毛主席が自ら発動したプロレタリア階級独裁の理論を学習する運動を悪辣に攻撃し、生命力を備えた新生事物、つまり老・中・青の三結合による指導機構を否定し、自分の意見と違う青年幹部を排斥し、しかもいまだ悔い改めようとしてない一群の走資派や政治的に大いに問題のある人物を各級の指導的ポストに引っぱり上げ、政権の性格を変え、中央や毛主席の存在を無視しました。同時に、さらにあるいくつかの地区の奪権活動を計画的に支持したり、直接に指揮したりしてトラブルをつくり出し、セクトをつくるよう挑発し、去年の杭州事件、山西事件のように中央を分裂させ、(一九七五年春から夏にかけて労働者が賃上げ要求のストに立ち上がった事件——記者)……さらにまた最近、内モンゴル・貴州・四川などの地では革命大衆を鎮圧し、異なる意見を制圧し、ブルジョア階級の独裁を実行するなど、これらはいずれも毛主席を頭とする党中央

に向けての一連の計画的・計略的な権力篡奪の陰謀活動なのであります。去年の七、八、九月の三カ月の巻返しのはやては、決して偶然ではなかったのです。これは、ブルジョア階級の立場と観点に死にもぐるいですがみつく、党内の悔い改めようとしてない一つまみの走資派が、プロレタリア文化大革命の偉大な成果を否定し、社会主義の新生事物を抹殺し、何度も巻返し政治運動を起こし、文化大革命を清算しようとした、組織をもち、綱領をもち、理論をもち、計画をもった一つの活動なのです。

闘争はブルジョア階級がかき立てるもので、われわれではありません。しかし彼らのこうしたすべての陰謀は、必ずや自ら頭をぶつけて血を流し、失敗して地位も名誉も失ってしまうでしょう。これは革命人民にたいする一つの試練と鍛錬ではありませんが、勝利は必ずや毛主席を頭とする党中央の指導のもとにある幾億万の革命的人民大衆のものとなるでしょう。

時間が少なくなりましたので、運動の状況についてはもうこれ以上述べません。

しばらくしたら、さらに江青同志と姚文元同志の講話を聞いて下さい。彼らの話はさらに詳細でさらによいでしょう。われわれは全局から出発して一つの形勢をつくり、歩調を統一し、銃口をそろえ、まず中央、次に地方、まず上の方、次に下の方、まず党内、次に党外、まず政治、次に経済というようにしなければなりません。反面教材である『水滸伝』の評論にたいして、右からの巻返しの風潮にたいする批判と、ブルジョア法権の制限とを結合させなければならず、党内の、あの悔い改めようとしてない走資派を、理論上から批判するばかりでなく、同時に、彼が依拠し、それによって

存在している社会的基礎と思想的基礎を、さらに掘り出し、プロレタリア階級文化大革命と批林批孔の偉大な成果を、一層強固にしなければなりません。それぞれの同志は、いかなる幻想も捨て去らねばならず、長期闘争の観念をもち、プロレタリア階級独裁の条件のもとで、革命を継続する勇氣と決心をもたなければいけません。誰もが強固な革命的信念を抱かなくてはならず、毛主席がいうように巻き返しを謀る者には決して好い末路などありえないのです。

最後に、もう一度鄧小平について話します。彼は重大な過ちを犯しました。しかし党は依然として彼が自分の過ちを認識し、真面目に検討し、党と革命的同志の助けを受け、毛主席の正しい路線に戻

り、もう一度新たに隊伍に戻ることを望んでいます。ある人は、いくつかの地区で彼を守ろうとしています。私はそんな必要を認めません。というのは彼自身が悟るならば、自分で自分を守るのが一番よいからです。当然、私たちが彼に誤りを認識する一つの過程を与えることができること、そのうえ辛抱強く待つことができることを望みますが、彼が現在から始めて、もう二度と誤りを繰り返さないのなら、また地方へ行くのもよし、また巻き返すのもよし、第二の闘争を被ることを恐れぬのもよしなどということを、まさか共産黨員がいうべき言葉でありましょうか？。

〈解説〉鄧小平再復活の謎を解く重要文献

——中嶋嶺雄

(東外大教授)

「四人組批判」の矛盾

毛沢東死後の喪が明ける前日、こともあろうに、毛主席に四十年も連れ添った妻であり、いまは「喪主」でもあるべき江青夫人もろとも、王洪文、張春橋、姚文元という文化大革命の輝かしい旗手たちが一網打尽に打ってとられた衝撃的な北京政変以来、ちょうど一年になろうとしている。

その中国は、話題を呼んだ今夏の鄧小平再

復活と十一全大会によって、文化大革命の路線から最後の訣別し、毛沢東以後の時代を本格的に歩み始めた。だが、文化大革命の中心的な担い手をことごとく打倒しながら、毛沢東路線の絶対的正当性を強調し、鄧小平再復活を決めながら、その再失脚をもたらし、昨春の天安門事件にはまったく言及しないなど、今夏の政治的儀式には、あまりにも多くの矛盾が露呈していた。そして「四人組」という「悪役」に問題のすべてを帰着させるこ

とによって、かろうじて当面の状況を切りぬけようとしているといえなくもない。昨年四月七日付の二つの党中央の決議は、「毛沢東主席の指示に基づき」というお墨付きによって、華国鋒の政治的台頭を確定し、同時に鄧小平を「反革命分子」として追放したはずなのに、これらの問題がどのように処理されて鄧小平再復活が実現したのか？鄧小平は本当に自己批判したのか？華国鋒と鄧小平の関係はどのようなものなのか？こ

正論

創刊四周年増大号 11

昭和五十二年六月八日発行（毎月一日発行）通
三号 昭和五十二年十一月一日発行（毎月一日発行）通
巻第百十七号 昭和四十九年五月二日第三種郵便物認可



独占掲載・鄧小平の「自己批判」全文
教育現場報告・揺れる高校二年生／角間隆
革新ライバル物語・不破哲三と高沢寅男

これらの本質的な疑問にたいして、今回の華国鋒政治報告以下の公式文獻は、なに一つ説明を与えてくれなかった。

周路線への読美ノ

ここに紹介した二つの非公開文獻は、これらの問題を解くカギを、真正面から提供しているという点で、最近の中国情勢に関するいくつかの非公開文獻のなかでも、飛び抜けて興味深く刺激的で重要なものだといえよう。

鄧小平の「三中全会に際しての講話」は、今日の鄧小平問題のすべてを語り尽くしているといつてよく、読者をわくわくさせるようなリテリィに満ちている。

鄧小平は、周知のようにかつて劉少奇とともに実権派の重鎮であったが、少なくともここでは劉少奇と一線を画していることがわかる。しかし、文化大革命のゆきすぎや弊害を大胆に指摘し、文化大革命が中国を「封建時代」のようなものにしてしまうとさえ語っているのである。そして彼は「四人組」と終始たたかってきたのだが、とくに、自分が天安門事件によって失脚させられた経緯を回顧し、

「私はこの不愉快なことを再び論じたくありません」

と、あからさまに語って真実を吐露している。

もとより毛沢東その人の免罪には、細心の注意をはらって毛沢東への忠誠を誓い、華国鋒の指導権を認めて、彼を立ててはいるが、「安定團結」を周恩來の教えだと述べて全体に亡き周恩來を礼讃するなど、やはり鄧小平の面目躍如だといわねばならない。

鄧に冷い態度

華国鋒の、「右からの巻き返しの風潮を反撃し鄧小平を批判する問題に関する講話」は、まさに走資派批判が吹き荒れていた昨年二月下旬、政治的に台頭したばかりの華国鋒が鄧小平を批判した重要な「証文」である。

それだけに、鄧小平再復活後の今日、華国鋒にとつては禁断の文獻であろう。もっとも、華国鋒はそこで、鄧小平が誤りを認めてもう一度隊伍に戻ることを望んでいるとも語っているのだから、この点は華国鋒の立場からしても、一つの免罪符にはなるが、総じて鄧小平にたいしてきわめて、冷たい態度で

あることは歴然としている。

このあたりのニュアンスこそ、鄧小平再復活が実現しそうでなかなか実現しなかったことの真因であるのかもしれない。

そして、今日では、党規約のなかにまで位置づけられた「四つの現代化」を華国鋒は強く批判し、この時点ではなお文革派としての立場から江青や姚文元を高く評価していたことは、鄧小平の立場との決定的な相違を証明している。

この講話のなかでは、鄧小平が文化大革命以来の諸問題について、「問題はただ林彪一人にあるのではなく、林彪が死んでしまったからといって、過去のことは追及しないというわけにはいかない」と語ったことも、批判的に伝達されている。この言葉に、鄧小平の「本音」が露呈しているのだとしたら、当面はともかく、まだ八年や十年は健康に自信があると鄧小平みずから語っているだけに、やがて華国鋒と鄧小平とのあいだの角違は避けられないような気がする。いずれにせよ、ここに紹介した二つの文獻によって中国の見えない部分がかなり見えてきたといつても過言ではあるまい。